

## ジョン・エリオット・ガーディナー: モンテヴェルディと私

19 回目の「聖母マリアの夕べの祈り(晩課)」指揮に際し、ガーディナーが音楽の道に進むことになった経緯がどうしてモンテヴェルディの大作だったかを語る。

取材者: Tom Service  
2010 年 9 月 2 日、The Guardian 記事



*'Nothing prepared me for music like this' ...Photo: Chris Christodoulou*

モンテヴェルディと私の関係は私が 8 歳の時まで遡ります。フランスの偉大な教師、ナディア・ブーランジェには後に私はパリで師事することになるのですが、彼女がブライアンストンの夏期学校に教えに来たことがありました。1950 年初めのことで、道一本先に行けば、ドーセットの私の家がありました。校長のウィリアム・グロック先生はブリテン、ティペット、ヒンデミット、ストラヴィンスキー、イモーゲン・ホルストたちを招聘したりもしていました。ちょうどその頃、グロック先生はマリピエロ版のモンテヴェルディ・マドリガル集を手に入れたところで、それをブーランジェが指揮したのです。そんな訳で私は子供ながらその素晴らしい音楽作品を 20 世紀の偉大な教師の一人の下で歌ったのです。

それが私とモンテヴェルディの音楽との最初の鉢合わせでした。しかし彼の「晩課」はさらに大きなショックを与えるものでした。その曲は 1950 年代の終わり頃に、ヨーク大聖堂のウォルター・ゲールが指揮するロンドン交響楽団の演奏をラジオ放送で聞いたのですが、私はぶっ飛ばされましたね。我が家ではあれこれ音楽を盛んにやってたけど、こんな音楽を聞くという心構えはまったく出来ていなかった。すごく魅惑的で、ぐっと惹き寄せられて、力強いドラマの感覚、それに私は惚れ込みました。あの時が多分、頭の中にその考えが芽生えたのだと思います。いつの日か、これに取り組んで自ら演出したいと。

その機会はケンブリッジ大学に進学したときに訪れました。その段階ではまだ私は生涯どの方向に行くか明確ではなくて、歴史書を読んだり、中東に対して身近に接触したりしていました。幸運にも私の指導教官、社会人類学者のエドマンド・リーチはとても好意的で、一年休学して私が音楽家になるのか一度しっかり考えることを許してくれたのです。それで私はその試験として「晩課」演奏会をキングズカレッジ礼拝堂で開催・指揮しようと決めたのです。

それをひとつの作品として捉え、晩課を構成しているひとつひとつの聖歌[psalm]、モテット、賛美歌[hymn]、ソナタ、祈祷書聖歌[canticle]のシークエンスをアルマディーノが1610年に出版した順序通りに演奏しようと言ってくれたのは、デニス・アーノルドです。サーストン・ダート教授には、当時の音楽学のシャーロック・ホームズ的存在でしたが、自分自身の版を作ったと言われてました。合唱団の組織にも着手して、男声はすべてケンブリッジ大学からでしたが、女声はロンドンの大学に呼びかけて地元で補強しました。声楽特待生のオーディションを大胆にも実施したのは、風変わりなマドリガル曲をレイモンド・レppardが同乗する前で歌うのみならず、モンテヴェルディなど彼らが1小節も知らないからです。彼らの歌唱法は完全に別物でした。私が目指していたのは、温厚なケンブリッジ風の心地よさ、甘美さではなく、生き生きとした色彩、ドラマ、活気と情熱で、それらがモンテヴェルディの音楽様式の証であると私は考えていたからです。

独唱者としてロバート・ティア、ジョン・シャーリー=クークたちを、そして奏者としてはサイモン・プレストン、アンドリュー・デイヴィス、デイヴィッド・マンロウを見出せたのは幸運でした。1964年3月5日の演奏は多分に間に合わせのやつつけ仕事だったでしょうが、大層な盛り上がりとなり、自分にとっても啓示的でした。それで指揮者として修行しようと思えるようになったので。

私はこれまで様々な場所で18回、晩課を指揮してきましたが、そのうち4回はプロムスです。聴衆は劇的に増加しました。しかし今回は1968年にロイヤル・アルバート・ホールで演奏したとき以来、初めての年です。会場はこの作品に絡む大論争のひとつで、なぜ、どこで演奏するためにモンテヴェルディは作曲したのか？定かなことは判りません。でもモンテヴェルディが後に礼拝堂楽長になったベネチアのサンマルコ教会と「晩課」の間には典礼形式での深い縁がある、私はそんな感覚的な関連性を感じます。1986年に私がそこで演奏録音した時は、大聖堂を球状に埋めたのですが、演奏者たちをどこに配置し、モンテヴェルディが考えた音楽の空間的構想をどう実現するかという課題がすべてサンマルコでは回廊や説教壇も使えて自ずと解けてしまったのです。もちろん、「晩課」を演奏し聴くにふさわしい場所はサンマルコしかないと言うつもりはありません。これは単に私の嗜好であって、そこで聴くのがベストだなど。目にも耳にも、それは大正餐ですよ。

「晩課」をどう演じるか、常に多くの議論があるでしょう。しかしこの大作がより多くの解釈に耐え、また触発することができるものであると定義するなら、「晩課」は合格ということです。典礼や歴史的背景についての音楽学的な研究はどれも素晴らしいことですが、それで行ける先には限りもあります。モンテヴェルディが出版した形での音楽、尋常でなく目覚ましく効果的な音楽シークエンスが我々に残されているという現実に直面し、さてそれをどうするかなのです。

他の作曲家の音楽を加えるべきだと言う人、楽章の順序を入れ替えすべしと言う人、グレゴリオ聖歌をもっと載せようと言う人、ふたつの楽章について四分音転調して下げると言う人など、いろいろいるでしょう。私は現状のままで驚異的に良い状態だというのが実感です。演奏会でもそれで機能してくれます - 18回演奏してみて、出版された通り何も加えず、何も削らず、オリジナルの順序で演奏するのがインパクトは最大になると今確信しています。

モンテヴェルディを表象すると私が信じるすべてのものが「晩課」には結晶化されています。歌詞と音楽に素晴らしいシナジーがあり、当時知られている最古から最新までの驚嘆すべき音楽大全であり、絢爛さ、演奏妙技、作曲技法の面で同時代人の誰をも凌ぐスケールにありました。この作品は、音楽は人間のあらゆる情念を表現できるものというモンテヴェルディの基本思想を具現化しています。愛や怒り、苦悩、悲哀、憂い、そして熱い信仰やエロスの欲求など、情熱を音楽の中に書き記した最初の人物がモンテヴェルディなのです。それらすべてが「晩課」の中には含まれています。

そしてこの音楽は予言的でもあります。私がヴェルディやベルリオーズを愛おしむことの幾分は、例えば途方もない空間活用とか、「晩課」にその源泉があります。教会音楽の劇的脚色はベートーヴェンの「ミサ・ソレムニス」でその頂点に達しますが、その種子もモンテヴェルディです。

ロイヤル・アルバート・ホールの途方もない大空間でどのように演じるかのプランは持っていますが、それを見定めるのは演奏会までお待ちいただきましょう。申し上げておきたいことは、その演奏会は過去のひとつひとつの「晩課」公演と同様に、今の時代の体験であるということです。私は骨董趣味的に何かを復元しようとは思っていません。言わせていただければ、この音楽を我々が演じているように作曲家自身が聴くことはあり得なくても、そして彼が活着しているうちにも聴けたとしてもそれはアルバート・ホールのようなマンモス級の大霊廟ではなかったろうけども、これはユニークで、宝石を散りばめた音楽のシークエンスを作り出せた空想力と先進性を持った作曲家のビジョンなのです。そしてそのひとつひとつの部分がどれもマーラーの交響曲並みにスリリングですよ。

<https://www.theguardian.com/music/2010/sep/02/john-eliot-gardiner-vespers>